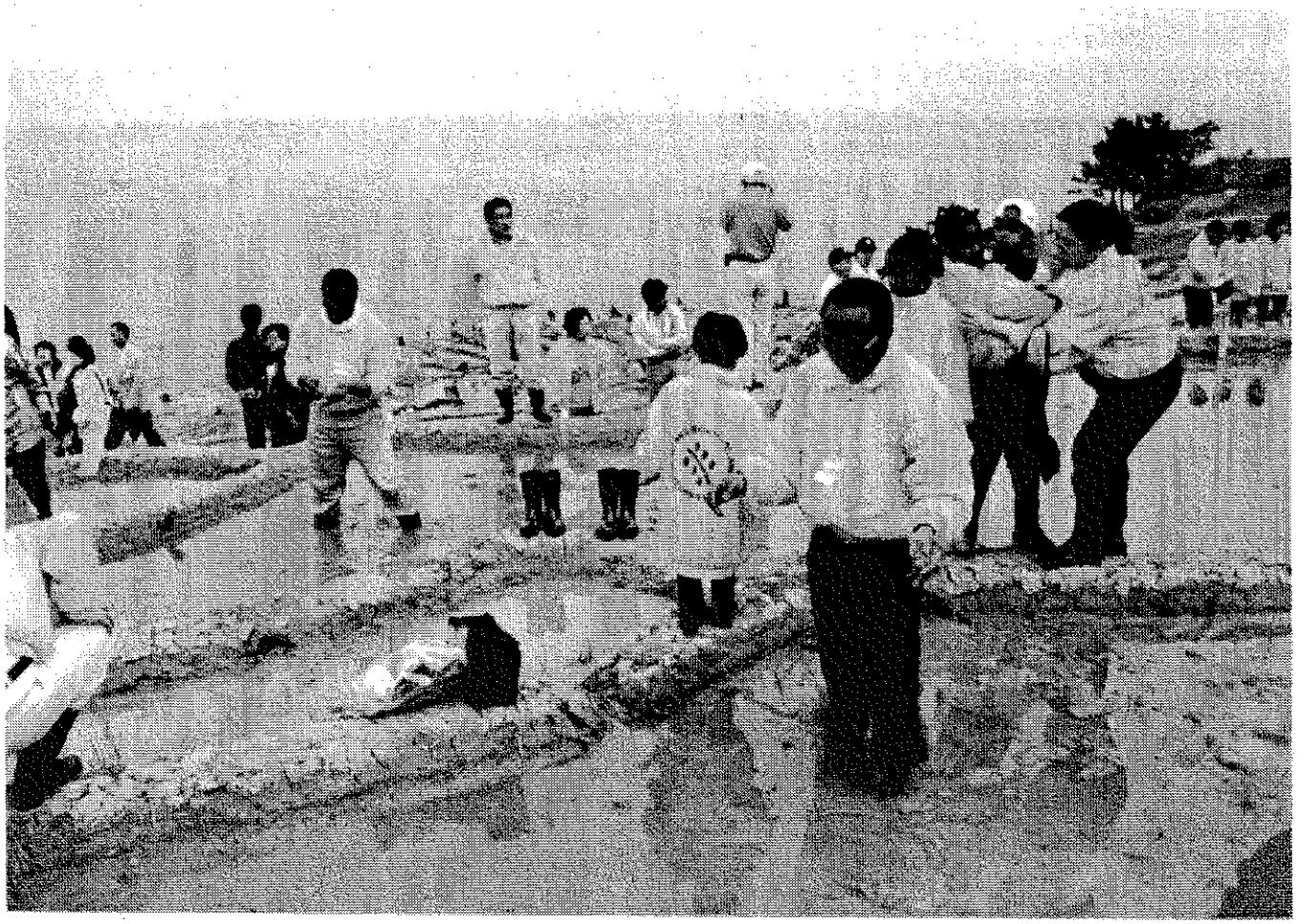
棚田学会通信

第２号
2000年10月31日発行
〒1855-8577
東京都小金井市本町6-5-3
ふるさときゃらばん内
TEL:042-381-6721
FAX:042-383-8614



地球環境米米フォーラム in 輪島（写真提供：輪島市）

目　次

表紙写真・輪島市白米の千枚田
千枚田の景勝保存……輪島市長・梶　文秋　1
各地の情報
山口県でパネルディスカッション……山口県農村整備課・山岡和純　1
坂折の棚田にて……恵那先史文化研究会・小板清治　2
中国の棚田(梯田)……農業総合研究所・白石和良　2
中国山地山間棚田の民俗調査……広島地域文化研究所・神田三亀男　3
大地の芸術祭に思う……横浜市・木戸幸子　3
農林水産省ニュース……農業総合研究所・篠原　孝　4
シンポジウム・現地見学会に参加して
棚田学会シンポジウム「すばらしきもの・棚田」報告……まちづくりプランナー・名田いくこ　4
星野村現地見学会報告……長崎大学環境科学部・堀田恭子　5
後援依頼を受けたイベント報告
棚田フォーラム２０００（京都府）
乗鞍環境フォーラム（国立乗鞍青年の家）
２０００年全国棚田サミット（福岡県浮羽町・星野村）
今年度棚田学会の活動予定

輪島市・千枚田の景勝保存に関する取り組みについて

輪島市長　　梶　文秋

輪島市白米町の千枚田は、紺碧の日本海と細やかな曲線模様を描いて積み重なる棚田が美しく調和して、優れた景観を創りだしています。「蓑の下　耕し残る　田一枚」と詠われるほどに１枚１枚が狭い田には、耕作機械の利用も叶わず、平地の田に比較して５倍もの労力が必要とされる困難な耕作が強いられます。千枚田の優れた景観は、平地の少ない奥能登において、限られた耕作地を営々と耕してきた先祖の汗の結晶ともいえるものです。

しかし、この貴重な千枚田も耕作者の高齢化などによって、その景観を維持することがきわめて困難な状況となってきました。

輪島市は、地元農家や関係諸団体のご協力を頂きながら耕作を維持し景観を保護するべく、昭和45年から耕作補助制度を開始し、さらに平成５年には輪島市、石川県、地元経済団体が協力して「千枚田景勝保存基金」を設立し、耕作支援の財政的裏付けをおこなうなど、積極的な支援を行ってきました。

また、平成11年には「地球環境米米フォーラムin輪島」を開催し世界各国の駐日大使などを千枚田に招き農作業体験を通じて環境保護を論ずる、さらには千枚田を舞台に田の神に愛を誓う結婚式を挙行するなど、さまざまな工夫をこらして千枚田を応援して頂こうとする努力を尽くしてきました。

今後も、ますます景観維持が困難となりゆく状況にありますが、ボランティア活動による耕作支援、観光事業との連携強化、財政的支援の充実を図り、末永く千枚田を守り伝えて、ふるさとの誇りとしてゆきたいと念願しています。

各地の情報

山口市で棚田学会ほか主催によるパネルディスカッション開催
テーマは「農業の持続的発展～棚田に見るその可能性～」

山口県農村整備課　山岡和純

山口県北西部の日本海に突き出る油谷町向津具半島は、そのほぼ全域が地滑りの危険と隣り合わせの地域で、標高２００ｍの高さから日本海に向かって一気に広がる壮大な棚田は、５００ha、２万枚以上にものぼり、ため池も２０００ヶ所以上が点在する西日本一の大棚田地帯と称されています。

しかも、規模が大きいだけではなく、日本海に沈む夕日と入れ替わりに現れる漁り火が揺れるロケーションがドラマチックな感動を与える棚田としても有名で、「日本の棚田百選」にも選ばれ、多くの写真家達から取って置きの被写体として愛されています。

山口県農村整備課では、同課の前身である耕地課が創設されて７０周年を迎えた記念とともに、昨年７月に農政の憲法とも言える食料・農業・農村基本法が施行されて１年が経過したことを受けて、農業の持続的発展あるいは多面的機能の発揮といった新基本法の理念を一般に広く啓発するため、一連の記念行事を企画しました。

その一環として、７月８日、山口県山口市民会館で「農業の持続的発展～棚田に見るその可能性～」をテーマにしたパネルディスカッションが棚田学会と食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議の主催で開催され、さらに引き続き同会場で農村ミュージカル「噂のファミリー　１億円の花婿」が上演されましたが、有料開催にも関わらず県内外からの熱心な参加者約１２００名を集め、新基本法の理念を棚田から学ぼうという大胆な発想のイベントは大きな成果を収めることができました。

また、会場では、山口県の土地改良の歴史をわかりやすく紹介するとともに、新世紀に向け山口県の農業農村整備の新たな展開方向を提唱した小冊子「目で見る山口県の農業農村整備」が併せて配布され、水と大地の恵みを育む営みの理解に一役買いました。

パネルディスカッションのコーディネーターを務めた棚田学会会長の石井進・東京大学名誉教授と、カナダ出身で宮城県立大学講師のアン・マクドナルドさん、東京農工大学の千賀裕太郎教授、早稲田大学の中島峰広教授、地元山口県中原中也記念館の福田百合子館長、藤田芳久油谷町長の５名のパネリストは、これに先立って前日午後と当日午前中に全国から参集した７０名余りの参加者とともに向津具半島一円の現地調査を行い、地元の農家等とも大いに意見交換をした上でパネルディスカッションに臨みました。

議論のなかでは、高齢化による担い手不足や耕作放棄などの厳しい現状が報告された後に、パネリストからは、

棚田の持つ「多面的機能」に関し、国土の保全、良好な景観の形成、保健休養の場の提供等の「公益的機能」と、文化の伝承、情操かん養といった「より高質な機能」の両側面での重要性が指摘され、「もっと日本人がきちんと農業を評価することが、国際的な理解と国内農業の持続的発展につながる」など、厳しい意見もでました。

さらに、地すべり地帯であるこの半島にこれほどの棚田やため池が今なお維持されている要因は何か、その答えこそが新基本法に掲げられた理念の柱の一つである「農業の持続的な発展」のキーワードとなり得るのではないかとして、活発な議論が展開され、この地と関係の深い毛利元就の「三本の矢」になぞらえて、「経済的持続性」「物質的持続性」に加えて「こころの持続性」を確保することが我が国農業の持続的発展を図る上で大切であるとの結論がまとめられ、全国に向けて提言されました。

最後に、パネリストを代表してアン・マクドナルドさんから、落葉広葉樹林の山々を背景に水田と赤橙色の石州瓦の家並みが佇む微地形に彩られた山口の美しい農村景観と、この景観を支える農村地域の人々の心の美しさに対する感謝と賞賛の辞が述べられ、会場から沸き上がった大きな拍手のなかで熱のこもった討論が締めくくられました。

岐阜県伊那市の坂折地区の棚田で

棚田稲刈体験と石垣棚田をめぐる学習の会

恵那先史文化研究会　小板清治

平成１２年３月、恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全検討委員会（委員長・早稲田大学教授中島峰広氏）が坂折棚田の整備・保全について、圃場整備についての強い要望を入れながらも、石垣棚田の保全活用・農作業の安全・導水路の改善と広い視野に立つ棚田をめぐる交流が恵那市長に答申され、それを受けて行政、地元が一致して、まず「棚田地域緊急保全整備事業」が動きはじめた。

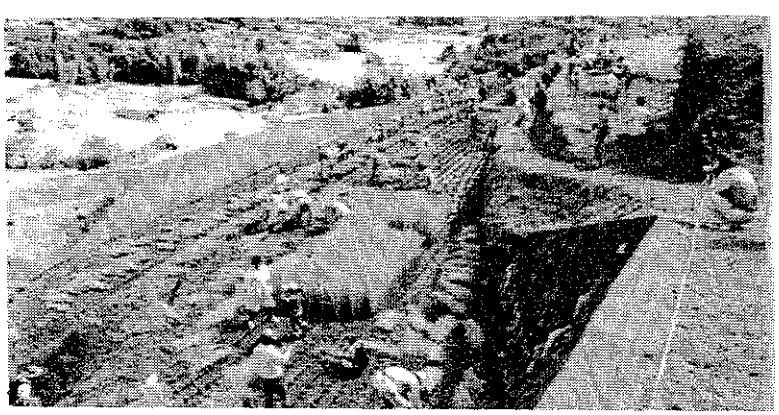
その一環として、１０月１日（日）には、農業団体（恵那市農業振興協議会）が主催して、地元坂折の農家、行政、ＪＡ、それに恵那先史文化研究会がスタッフとして、参加・協力して「棚田稲刈体験と石垣棚田の見学学習の会」がおこなわれた。

参加者は名古屋、多治見など７市から家族グループ３０組、その内訳は大人４５人、子供２６人の計７１人、迎えるスタッフは地元農家１６人をはじめ、６０余人。

コシヒカリの棚田３枚（約１０ａ）を家族グループで、稲刈りが進められ、午前中に「ハザ」かけまで終了し、昼食はおいしい味付けご飯に、豚汁がだされた。午後は４グループにわかれて、坂折石垣棚田の見学となった。子供に稲刈りを体験させたいという声を強く感ずる会であった。

参加内訳

地区名	組数	大人	小人	合計
市内	7	１０	4	１４
可児市	2	3	5	8
多治見市	9	１５	5	２０
土岐市	4	6	3	9
中津川市	1	1	0	1
瑞浪市	2	2	2	4
美濃加茂市	3	5	7	１２
瀬戸市	1	2	0	2
名古屋市	1	1	0	1
合計	３０	４５	２６	７１



棚田稲刈体験と石垣棚田をめぐる学習の会

中　国　の　梯　田

農業総合研究所　白石和良

棚田に相当する中国語は「梯田」である。ただし、中国語の「田」は農地全体を意味しているので、中国語の「梯田」は、棚田と段々畑の両方を包括した概念である。

中国での「梯田」の発生は前漢時代にまでその雛形が遡れるとされているが、「梯田」という言葉が最初に文献に現れたのは南宋の范成大の『驂鸞集』である。南宋時代には遼や金の進入によって中原の人民が大量に南遷し、食

糧確保のために大量の「梯田」が造成された。こうした現実実態が「梯田」という言葉を産み、定着させたと思われる。

「梯田」の発生と拡大は生存のための食糧確保の必要性からであった。現在の中国でも事情は同様である。「梯田」の造成と維持は、貧困地域の食糧確保措置の重要な措置の一つとして位置づけられている。1畝(15分の1ha)の「梯田」が造成できれば1人分の年間必要食糧が確保できるからである。

中国で「梯田」の造成、整備が最も進んでいるのは甘粛省庄浪県である。30余年間の努力によって総農地面積の83%、傾斜地農地の92%を「梯田」に改造している。この改造に要した費用の96.8%は農民の無償労働で賄われている。当然食糧自給は達成されている。

日本では棚田の保存が懸案であるが、中国では貧困地域の農民の生存と生態環境保全のために「梯田」の造成が懸案である。

中国山地山間棚田の民俗調査

広島地域文化研究所・神田三亀男

今世紀中に取材だけは、やりあげたい仕事を持っている。中国山地の瀬戸内海側と日本海側にまたがる山間棚田の民俗調査である。とりかかったのはことしの春からである。すでに広島県を主体に、島根、山口両県にわたって、１１ヶ町村の取材を完了した。これだけでも十分なのだが、やっていると、特色ある山間棚田地帯をことごとく渉猟したくなって、あと数ヶ所残っている。

中国山地の山間棚田地帯については、民俗学者宮本常一先生の「中国山地民俗探訪録」（未来社刊）がある。今更山間棚田の民俗調査でもあるまいと思われるむきもあるだろう。だが、宮本先生の探訪録は、昭和１０年代から昭和３３年代のものである。その後、数１０年の間に農村・農業の事情は一変している。

今の中国山地の山間棚田は、衰滅の極に達している。昭和３０年代後半から、挙集落離村、挙家離村はおびただしい。経済成長、近代化路線の裏側で、山間棚田を耕してきた農業者の高齢化、後継者不在、集落機能の弱化は著しい。山間棚田は日に日に衰亡している。そうした中での取材は極めて困難であるが、多年培ってきた人脈を頼りに、山間棚田の取材を重ねている。今やらねば、戦後の激変の中の山間棚田の事情を採集することはできないという思いからだ。

ここ３０年位の間に刊行された市町史などの農業生産活動については、ありきたりのことしか記述されていない。既刊市町村史民俗篇も採集していない事項を発見したりして、内心“やる価値あり”とよろこんでいる。

宮本先生が入られた山口県玖珂郡の山地にもこの夏、３回足を運んだ。終末期を迎えた高齢者ばかりが、飯米だけ作ってひっそりと暮らす山間棚田地帯。集落の棚田は半ば荒廃、その変容には、目を覆うものがある。

瀬戸内工業地帯の繁栄、都市の膨張の裏側に、農山村、山間棚田の極端な衰滅がある。私は民俗採取をするとともに、中国山地の山間棚田に活（い）きてきた農業者の、終末の声も集め、その生活の周辺にも目を注いでいる。

私の心を搏ついくつかは、短歌作品に結晶させている。これは年内に刊行する歌集「棚田残照」に収録する。中国山地山間棚田の実相を人間の情念にも訴えたいとねがっている。

里山・棚田が演出する新鮮な交流

大地の芸術祭＝現代アート展＝に思う

横浜市　木戸幸子

この夏、ふるさと（新潟県松代（まつだい）町）の里山や棚田が現代アートの舞台になりました。「越後妻有（つまり）トリエンナーレ２０００」は、近隣６市町村に３２か国１４０人のアーチストが参加して７月２０日から９月１０日までの会期を終え たところですが、ふるさとでの芸術祭を、ちょっと外から見つめてみたいと思います。

この豊かな自然と棚田密集地域での大胆とも思える催しに当たっては、もちろん賛否両論があり、戸惑いをなかなか払拭できぬままの開幕だったようです。しかし、会期が進につれマスメディアでも大きく取り上げられるようになり、徐々に来訪者も増え、一本筋の商店街はさながら都会の歩行者天国並みの賑わいになりました。

「遠くから来られたお客さんに冷たいお茶を」と、麦茶の接待が所々で始まり、来訪者との話しも弾み、出展作品のあれこれや、田舎の暮らしのことなどを語り合う場になりました。

都会から来た人たちも作品鑑賞をしながら、緑の里山や棚田に心癒されたことでしょう。最初は戸惑いの中でのスタートでしたが、このアートという非日常的なものを通して、お互いにこれまでなかった新鮮な交流ができたのではないかと思います。ある役場の担当者が「棚田の威力は凄いね。ここに居ると大変なだけなのに」と反響の大きさに驚いていました。

棚田が担っている大切な役割を一人でも多くの人に知ってほしいと願って会員に名を連ねている私としては、このような催しを通して関心を寄せてもらうのも楽しみながらの入り口になるのではないかと思いました。

農林水産省ニュース

棚田地域等保全整備事業の継続

農業総合研究所　篠原　孝

棚田地域では、農業基盤や生活環境の遅れや、高齢化・過疎化の進行等により、耕作地が放棄されたり、土壌浸食防止や地下水涵養等の多面的機能の低下が懸念されている。

このため、中山間地域の総合的基盤整備等の従来の施策を補充するものとして、かねてより「棚田地域等緊急保全対策事業」を実施してきたところである。

平成13年度については、これを継続する形で「棚田地域等保全整備事業」（概算要求額20億円）を新めて要求している。

その他の概要は次のとおりである。

事業内容

（１）事業の実施

①棚田地域保全計画の策定

都道府県あるいは市町村が保存すべき棚田などを選定し、棚田等の保全、自然環境の保全、都市住民等との交流、地域の維持・活性化に関する計画を策定

②簡易な農業生産基盤整備

農道舗装、水路改修、区画整理等

③保全活動施設の整備

トイレ、手洗い場、作業小屋、鳥獣害防止柵等

④棚田保全推進事業（ソフト事業）

棚田地域保全計画を実施するため、活動の立ち上げ支援を実施

（２）地区当り事業費　１，５００万円以上／地区

（３）採択用件

勾配１／２０以上の農用地が当該地域の全農用地面積の１／２以上を占め、受益面積１ha以上、かつ、今後とも農業を継続する意欲のある地域

事業実施主体等

（１）事業実施主体　都道府県、市町村、土地改良区

（２）補　助　率　５５％

（３）事業実施期間　平成１３年度～平成１６年度

（担当課：農村振興局　農村整備課）

――シンポジウム・現地見学会に参加して――

棚田シンポジウム「すばらしきもの・棚田」報告

まちづくりプランナー　名田いくこ

８月３日、東京・日本橋三越で行われた「すばらしきもの・棚田」シンポジウムでは、各方面で棚田研究をしている３人のパネラーにより報告された。

早稲田大学文学部の海老澤吏氏による「棚田のルーツを探る」では室町時代の１４０６年の「高野山文書」が「棚田」という名称が出てくる最も古い文献であり、ここで命名された田を棚田の発祥の地として、紹介された。紀伊

国荒川の荘、現在の和歌山県桃山町がその棚田のルーツである。この棚田は比較的平野部にあり、必ずしも狭小地ではない。海老澤氏は、棚田の語源から「棚田にはステージ性があったのではないか」と述べ、従来の概念から棚田の姿を捉え直す提言をした。

確かに、私自身、棚田の持つ風景、自然の中の美しさに惹かれている。また、多くの方が共感する点もそこにあるのではないかと、思いを新たにした。

続いて「棚田を支える石垣の保存」では、福岡県浮羽町石垣保存実行委員会の樋口泰範氏から、石垣職人さんと共に行った浮羽町の棚田調査が報告された。現存する石垣を見て職人さんたちは、使っている道具から時代を推測し、形から積んだ人を言い当てる。「浮羽の石垣」（浮羽町実行委員会報告書）では、石積みの種類や道具など、入念な調査結果が報告されている。

最後に樋口氏は今後の課題を述べられたが、その中でも「石垣の環境保全への科学的な機能、経済性の証明」を挙げたのが印象的だった。報告の中で、次のような石垣職人さんの言葉が紹介された。

「石垣がちょっとこわれると建設省はコンクリートやブロックですぐ巻き上げてしまう。そんため抜け道をふさがれた水が中に溜まって、かえって大きな事故になったこともありまっしょうが。そんなに銭かけてよそから材料運ばんでもその辺の石を集めりゃすぐの元通りになるですバイ」

長年の経験に基づいた示唆に富む言葉だ。これが、早く科学的に証明されることを願わずにいられない、実感のこもる報告であった。

「棚田を潤す水利用の工夫」では恵那先史文化研究会の安藤利道氏により恵那市坂折地区の事例が紹介された。水温管理のための「手あぜ」「竹桶」など様々な工夫があり、同じ地区の中でも水の使い方が微妙にコントロールされている状況が報告された。水田についてほとんど知らない私も、棚田を担う方たちの水に対する繊細な感覚を垣間見ることができた。

“まるで日本史の野外授業”

福岡県星野村棚田現地見学会に参加して

長崎大学環境科学部　堀田恭子

福岡県星野村の現地見学会に参加しました。発見は三つ。一つは石積みの棚田の見事なこと。星野村の棚田を全部案内していただいて、石積みの棚田を満喫しました。

放棄されている棚田もありましたが、棚田を見上げ、棚田を見下ろし、棚田の中を歩きながら、先人と田んぼの豊かなつながりを肌で感じました。そして二つ目、その棚田の石積みと対話できる人がいたこと。これは私にとっては大発見でした。石を見ただけで「これは何々時代にできたもので、造られて数百年はたっているね」とか、「この石積みは、おそらくこうやってできたんだろう」とか、「このカナメイシはね……」とか、「ほらそこの石は石臼の石が使われている」とか……。

他の参加者の方は、すでにわかっていたことかも知れません。けれど私にとっては、「すごい」の一言です。まるで日本史の野外授業に出ているような(そんなのあるのかわかりませんが)、そんな気分になりました。そして、ふと「人はその道によって賢し」という言葉を思い出しました(私もがんばらなくは……)。

◇

関東平野で生まれて育ち、４年前に山深い信州に就職し、そこで土坡（どは）の棚田に出会い、棚田の研究会に誘われました。縁あってこの４月から九州で暮らしています。専門は環境社会学ですが、公害問題をずっとやってきた私にとって、棚田にどう取り組んでいったらよいか、まだまだ模索中です。

土坡の棚田にしろ、石積みの棚田にしろ、保全の立場にたつとするならば、担い手の問題を中心にして棚田をどう保全していくか、その地域にあった棚田の保全システムとは何か、そんなことを考えていけたらなと思います。そうそう、最後の三番目の発見、それは棚田に関わる人々は、たいへんやさしく気さくな方が多いということでした。知り合いもないまま、たった一人で参加して話についていけるかな、泊まるけど一人で時間をもてあましたらどうしようかな、なんて不安がうそみたいに、昼間も夜も楽しい時間を過ごしました。多分野にわたる研究者、国や県や市町村、博物館、ＮＧＯ、ジャーナリスト、純粋に棚田が好きな人、みな初対面にもかかわらず、ざっくばらんに夜中まで話がはずみました。このような機会を設けていただいた星野村の方々、そして学会事務局の方々に心からお礼申し上げます

――後援依頼を受けたイベント報告――

「棚田フォーラム２０００」開催

京都府農林水産部耕地課開発係　技師　後藤陽嗣

８月２４日、２５日の両日、京都府及び京都府農業土木技術連盟の共催により、京都府の丹後地方で「棚田フォーラム２０００」　―棚田でつなぐ山・里・海―　が開催されました。

このイベントは、一般者向けのＡコースと小中学生向けのＢコースを企画し、それぞれ１６２名、８５名の参加者がありました。

このうちＡコースでは、２４日に講演会を行い、京都府立大学教授の宮崎猛先生からは、棚田におけるオーナー制や維持管理実態について、また、前京都府立海洋センター所長の篠田先生からは、海から見た山・里・海のつながりについて講演がありました。その他に棚田保全活動の事例報告として、京都府大江町毛原地区での棚田オーナー制やワークショップの取組みが地元農家から紹介されました。

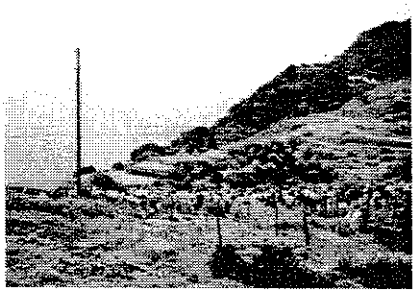
翌日、講演会参加者は丹後地方の代表的な棚田である伊根町新井、丹後町袖志の２か所の現地見学を行い、日本の農村の原風景が残る中で、短歌、俳句を詠みました。参加者の中には、「心休まるふるさとの景色を見ると、自然と句が思いつくんだ」と、１人で１０首以上詠まれる方もいました。

また、Ｂコースは、２５日に実施し、地元の小学生や保護者を中心とした参加者が、丹後町袖志での棚田ウオッチングや海岸での地引き網などを楽しみ、山・里・海のつながりを体験しました。

さらに農村リゾート公園「丹後あじわいの郷」では、棚田写真展、山・里・海の生物展、絵画展、棚田の紙芝居やジオラマ展を見学しました。

子供たちは自然とのふれあいを通じ、楽しい夏休みのひとときを過ごせました。

講演会場入口


棚田現地見学・伊根町新井

大漁地引き網・丹後町

乗鞍青年の家　環境フォーラム

国立乗鞍青年の家　茅野敏英

岐阜県の国立乗鞍青年の家では、棚田学会の後援を戴き、水をテーマとして“乗鞍環境フォーラム”を6月２４日と２５日の２日間の日程で開いた。ここでの趣旨は、山と海、それを繋ぐ水の流れを中心として人と文化にふれながら広い視野で環境を捉えようというものである。

２４日には、特別講演として林公義先生から生き物地球紀行の番組制作を通した自然観のご講演をいただき、シンポジウムとして中島峰広先生、長崎福三先生、森巌夫先生、佐治先生、西條好迪先生に棚田や魚付林、里山や文化などについてご提言いただいた。そして具体的な事例をもとに分科会で話を深めた。

第２日目は４ヶ所に分かれて野外活動を実施した。２日間で３００人以上の参加を得て、地域の環境のすばらしさや、人との出会いの楽しさを実感しながら環境のあるべき姿を見つめ、参加者の意識の向上を図ることができた。

児童たちも“棚田解説”や太鼓で参加

２０００年全国棚田サミット

実行委員会事務局　滝内宏治

２０００年（第６回）全国棚田サミットは、９月１３日、１４日の両日、福岡県の浮羽町・星野村で共同開催された。１日目は星野村総合福祉センターでの総会に続き、意見交換会が開かれた。棚田支援市民ネットワークの高

野光世事務局長は「都市部を中心に支援のネットワークを拡げる必要がある」と強調し、また岐阜県恵那市、島根県柿木村などから棚田保全活動についての紹介があった。

午後の特別公演では、俳優の柳生博さんが「森と暮らす、森に学ぶ」という演題で山梨県の八ヶ岳山麓で２５年間にわたる植樹活動などの経験を踏まえ講演。約７００名が親しみのある話に聞き入った。続いて、「棚田の里めぐり」では、両町村が募集したボランティアガイドが同乗するマイクロバス２２台に約４００名が分乗し、日本棚田百選星野村の広内・上原棚田と浮羽町つづら棚田を巡った。

夕刻からは、交流会が浮羽町の御幸小学校体育館で約３００名が参加して開催され、地元特産品や地酒を置いた屋台が並び、また星野村の御良八幡太鼓、浮羽町のみざれ太鼓なども披露されるなか、参加者同士懇親を深めた。

２日目は、浮羽町民ホールに会場を移し、約１千人が参加するなかシンポジウムが開催された。早稲田大学の中島峰広教授（棚田支援市民ネットワーク代表）による基調講演「棚田に吹く風」では、棚田オーナー制度を中心に全国各地で進む棚田保全の取り組みが紹介され、「地域の実情に合わせた方法で棚田を語ろうと浮羽町の姫治小学校と星野村の椋谷小学校の児童が登場。姫治小は「棚田ニュース」と題して、ニュースキャスター役とコメンテーター役がやりとりしながら、パソコンの場面をスクリーンに映して、石組みの造り方や棚田の良さを紹介。姫治小は、棚田の田植えのときに拍子をとったという星野太鼓を披露した。

続いて、パネルディスカッションでは、コーディネーターとしてＲＫＢの納富昌子さん、パネラーとして基調講演をされた中島峰広さん、浮羽町の棚田オーナー横川洋さん、星野村棚田保存実行委員会山科藤夫さん、浮羽町石垣保存実行委員会樋口泰範さんが登場。まず棚田が切り捨てられる社会背景を分析し、さらに棚田保全を通じた具体的な地域活性化策を検討。

午後からは、作家の立松和平さんが「自然の声を聞こう」と題して記念講演を行った。最後に、棚田保全活動の強化やグリーン・ツーリズムの展開を推進し、「２１世紀を棚田新世紀に」とうたった共同宣言を採択した。

ーハガキ便りー

星野村の見学会で印象深かったこと。村内のほとんどの集落に棚田が広がり、しかもそれぞれの地形や地質、歴史などに応じた個性的な姿を現している。有名な広内の棚田もその中の一例なので、いくつもの他の集落と比較しながら、じっくりと拝見できたことは実にありがたかった。

もう一つ、今は八女茶の生産地として著名なこの村が、実は江戸時代に金山で栄えた地であると知って驚いた。同時に村内に石積みの棚田が発達した理由も、これと関係するかもしれないということが話題となった。技術面でも、また米の消費人口が急増するなどの面からも、興味ある課題だと思う。学会として調査できれば面白いことだろう。

（Ｓ・Ｉ）

今年度の活動のお知らせ

（詳しくは別紙案内にて）

第２回 棚田現地見学会

期　　日　平成12年11月25日（土）・26日（日）／１泊２日
見 学 地　岐阜県恵那市坂折棚田
参 加 費　５，０００円
募集人数　先着２０名
申込方法　同封の用紙にてＦＡＸか電話でお申込下さい。
申込〆切　11月15日（但し、定員になり次第〆切ります）

第１回 棚田研究会

講　師　水谷正一（宇都宮大学農学部）
日　時　平成12年12月９日（土）午後３時から
場　所　新潟館ネスパス（原宿）
お申込　棚田学会事務局まで

第２回棚田研究会は２月または４月第２土曜日の予定

編集後記

本年度より学会通信を年３回（10月、２月、６月）発行することに致しました。これは、棚田学会からの情報発信を多くしてほしいという会員諸氏からの要望に応えるものです。

内容としては、棚田学会が後援・協賛などをした会合や催し物の報告、棚田に関するトピックスや各地からの情報、一般市民、研究者、行政に携わる人達の声、研究会や見学会などの予告を考えております。

編集方法や内容に関してご意見がございましたら編集部（棚田学会事務局）にお寄せ下さい。

紙面の都合上、文字数は600字前後でお願いします。

（編集部より）

編集／中島峰広　小川直之　佐々木卓也　篠原 孝　橋本直子　原田 津　野村一正　水谷正一　板津洋吉　大島暁雄　高橋久代